

数字に対して抱く色彩のイメージ：認知メカニズムの可視化

「数字と色の結びつきは個人の単なる好みではなく、人間の普遍的な認知メカニズムと文化的背景に基づく」

1. 共感覚と研究アプローチ



「共感覚」の一般性：文字や音から別の感覚（色など）を引き起こす現象。数字に対して「温かさ」や「色」を抱く直感（例：奇数=暖色）の共通性と個人差を解明する。

オンラインアンケート

実験1（寒暖色選択）

- 対象：20代～50代 (N=66)
- タスク：「0～9」に対し直感で「暖色」or「寒色」を二者択一

実験2（7色選択&理由）

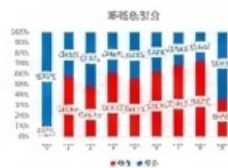
- 対象：20代～50代 (N=61)
- タスク：虹の7色から最適色を選択し、理由を自由記述

2. 発見：数字に刻まれた色彩の法則

Highlight A



「0」の冷たさ：90.9%が寒色を選択。概念的な「無」や「冷たさ」と強固に結合。



「1」の情熱：圧倒的な「赤」。「情熱」「1等賞」という強力な共通イメージが存在。



Highlight B



「奇数は暖色、偶数は寒色」

具体的連想を介さない抽象的な回答において、ほぼ全数字でこの法則が発現。数学的性質が心理的特性と脳内でダイレクトに統合されている。

3. 結論：連想プロセスとUI/UXへの実装



具体的理由

事物の想起と文化的背景。戦艦ヒーローの配色、ゲーム、学習教材など、特定世代が共有する経験が共通イメージを形成。

1 → 100

抽象的理由

数字の性質に基づく複雑化。数値増大に伴い、イメージが「原色」→「中間色」→複数の色が混ざる「パイクラー」へと変容。



- 非共感覚者にも、形のない概念（数字）を感覚的なイメージ（色）に変換する仕組みが日常的に機能している。
- この普遍的な認知バイアスを理解することは、ユーザーの直感に沿ったUI/UXデザインやプロダクト開発において極めて有効な指針となる。